

3節 協同的探究学習：「課題研究」を支え、学びをつなぐ

3-3-1 概要

(1) 目的

他者と協同しながら課題の本質に迫り、主体的に探究し続けることのできる生徒を育成するために、既存の教科のみでなく、課題研究にも「協同的探究学習」を取り入れている。

決まった解法を暗記することで身につく手続き適応型の学力（「できる学力」）だけでは、問題の本質を理解することができない。本校では、このような「できる学力」に対して、物事の本質を捉え、他者と協同しながら問題解決に向かうことのできる力を「わかる学力」と呼んでいる。「できる学力」「わかる学力」という概念規定や「協同的探究学習」の理念は、藤村宣之教授（東京大学大学院教育学研究科）によるものである。理解・思考型学習である協同的探究学習は「わかる学力」を育成するのに適した方法である。課題研究においても、因果関係について自分の考えで説明する力や、課題の本質を理解し、多元的・長期的に考える力を育成することができる。既存教科および課題研究の中で、「できる学力」のみでなく、「わかる学力」を育て、それらをつなげることによって、新たな価値を生み出す思考力を育むことを目的としている。

(2) 実践内容

1) 「協同的探究学習」の学びにはおよそ次の3つの段階がある。

- ①生徒が既有知識と発問を関連づけて解答できるよう、多様な方法で出せる解答があるオープン（非定型）な発問を準備する。
- ②多様な考えを比較検討して関連づける討論（協同探究）の場を組織し、生徒が解答の多様性や因果関係の深さを知る場とする。
- ③生徒が自分の考えを整理して発言したり、考えを深めたりすることができる個別解決（個別探究）時間を設定する。これは、生徒個人が討論の前後で理解や論理的思考を深めることにつながる。

このように、個別探究→集団による探究→再度の個別探究という流れが基本のパターンとなる。この中で、“生徒がお互いの考えを聞き、その共通点や相違点を考えながら、知識を関連づけることで理解を深める”という学習過程を用意することが協同的探究学習の本質である。

2) 「協同的探究学習」を取り入れる場面の例は以下の通りである。

- | | |
|---------------------|---------------|
| ①導入のアイスブレイク | ②その単元で最も重要な部分 |
| ③1時間の中の一部に非定型課題を入れる | ④簡単な実験の計画 |
| ⑤まとめの応用課題 | ⑥現代の課題について考える |
| ⑦課題探究（STEAMなど） | |

(3) 成果と課題

課題研究における協同的探究学習は、友人の探究方法を参考にして自分の研究の方向を再考・修正でき、自分の研究を客観視する力と批判的に考える力を身につけることができる。しかし、既存教科に比べると協同探究から個別探究へのフィードバックにおいて生徒間の差が生じやすい。この点にどのように対応するかを考える必要がある。

協同的探究学習は、教師主体で説明する授業と異なり、生徒の多様な発言にその場で対応し、生徒の独創性を楽しむ教師の力量が求められる。また、非定型の課題に対する生徒の記述内容を論理的に評価できる教師の力を育てていくことも継続的な課題の一つである。

(文責 石川久美)